

一関を訪ねる旅

NPO法人 大谷石研究会
理事 佐藤八紀

10月21日・22日に岩手県の一関方面を訪ねました。メンバーは塩田副理事長をはじめ総勢9名による旅でした。一関方面になった理由は、高橋事務局長理事の親戚の方がかつて旅館を営んでいた古民家を所有しており、そこで宿泊体験しながら一関から気仙沼方面を訪ねようという話が発端でした。旅の企画は一関に実家がある私が行いました。旅の内容は出来るだけ一関方面に残る石の建築と漆喰蔵や古民家を見学する構成にしました。

初日は11時過ぎに東北新幹線で一関駅に到着、レンタカーに乗り、酒蔵レストラン「せきのいち」で郷土料理の餅三昧の昼食を体験していただきました。その建築は塩釜石の蔵を改造したレストランと巨大な漆喰蔵（1919年完成）で、設計者は



辰野金吾の弟子である小原友輔です。塩釜石に感心した後は平泉の毛越寺庭園を散策し、その後奥州市の奥にたらずむ古刹で、本堂が巨大な茅葺屋根の正法寺を訪ねました。「みちのく」らしい豪放な建築に皆さん驚いたようです。その後、鼻深での秋を体験する予定でしたが、夕

横沢金山跡での集合写真

千厩地区にある酒蔵を再利用した交流施設

暮れが迫り予想以上に寒くなってきたので、早々に高橋さんのご親戚である堀込様のお宅に向かいました。堀込様のお宅はかつて金を採掘した横沢金山跡の前にたらずむ、江戸所代からの歴史がある古民家でした。囲炉裏端で天然のアユの塩焼きをはじめ様々な郷土料理をいただきながら堀込様が語る優雅で幻想的な西馬音内盆踊りを鑑賞しつつ夜は更けました。

次の日は陸前高田から気仙沼方面を目指して9時前に出発し、土蔵や漆喰蔵が連なる摺沢集落に立ち寄りしました。陸前高田では気仙大工や左官の技が実物展示されている伝承館（明治初期の気仙地方の民家を再現した建築と独特の濃い意匠をまとった漆喰蔵）を見学。陸前高田の復興状況を眺めながら気仙沼に向かい、市場の食堂で海鮮丼をいただき帰路につきました。

途中一関市千厩（せんまや）地区に残る茅葺屋根の古民家や、巨大な漆喰蔵が並び酒くら交流施設（1924年完成）を見学しました。母屋の贅を尽くした内部空間は目を見張るものでした。事務所棟は「せきのいち」と同じく小原友輔が設計していました。その後再び堀込様宅に立ち寄り、次の日遠野に向かう方々を残して一関駅に向かいました。「みちのく」の観光客が来ない「奥の部分」を体験したとても楽しい旅でした。

芦沼地区・大谷石建物調査報告会

NPO法人 大谷石研究会 会員 柏木裕之

芦沼地区・大谷石建物調査の報告会が、7月10日、地元住人に向けて「ふれあい西芦沼館」で行われました。この調査は、宇都宮市景観整備機構から委託を受けたNPO法人大谷石研究会と宇都宮大学安森亮雄研究室が中心となり、大谷石の街にふさわしい景観を掘り起こし、次世代に残していくために進められたものです。これまでに徳次郎町西根地区、上田原地区、上田地区の三方所で実施され、昨年10月17日に行われた芦沼地区の調査で一区切りとなりました。

その後3つの班に分かれて、集落に残る大谷石建物群についてざっくりぼらんに語ってもらいました。空気のように当たり前にある大谷石建物をテーマに据えるところに最初は戸惑いもありましたが、改めて思いを声に出してみることで、大谷石建物が個人の財産を超えた地域の宝であることをお互いに再確認でき、有意義な時間となりました。芦沼地区は、今も共同体が健在であり、生活の中に石が根付いていることを強く感じました。

冒頭、芦沼地区の大谷石建物群が宇都宮市の町並み景観賞を受賞したことが報告され、続いて調査をとりまとめた二瓶賢人さん（安森研究室大学院生）が発言しました。今回調査した70棟あまりのうち大谷石建物が7割を占め、他の地域と比べて高い割合を示していること。比較的幅の狭い街道に、背の高い大谷石建物が面していること。結果、大谷石建物が高密度に集中する景観を生み出し、道を歩くと大谷石で囲まれたような感覚を醸しめる点が、芦沼地区の特徴と結論づけました。

質疑応答では住民から、「文化遺産である大谷石建物群と、不便を強いられる道幅の狭さをどう折り合っていくべきか」という難しい問いが出ました。これに対し塩田副理事長は、「緊急車両が通れない道は不安であろうが、石蔵も芦沼地区のかけがえのない財産である。石蔵か道路か、どちらか一方を選ぶのではなく、共存の道を探していきたい」と話しました。



3班に分かれて、意見交換がおこなわれました

一方で、石蔵の将来を危惧する声も少なくありませんでした。芦沼地区の石蔵は、湧き水が作るおいしい米を保管するために作られました。しかし今では物置になるケースが増えており、石蔵を利用して歴史と記憶を次の世代に伝えていくことが消失を防ぐ手立てになるのでは、という意見も。また石蔵の新しい活用法や維持費用の負担も課題として挙がりまし。更に、農業を辞める人や子供が減っていることから、集落の将来像を描く中で景観も考える必要性が認識されました。

宇都宮市役所で報告会&意見交換会

宇都宮市役所で当会と宇都宮大学安森研究室とで行ってきた、徳次郎町西根地区・上田原地区・上田地区・芦沼地区の大谷石建物調査報告会を、地区住民代表も交えて行いました。市の関係課からも多くの参加をいただき、実のある意見交換ができました。



NPO法人大谷石研究会のホームページ
<http://www.ooyaishi.org/>

コンテンツ盛りだくさん

「大谷石百選 自然美・建築美」
(第2版 第1刷発行) 絶賛販売中

A4変形版 148頁 2000円

大谷石 東西南北

歴史を伝え、用途を広げる札幌・石山の「軟石や」

(NPO法人 大谷石研究会広報担当 平沼 隆志)

昨年に続き、今年の夏も札幌市の石山地区を訪ねた。大谷石と同じ凝灰岩「札幌軟石」の産地だ。農地と住宅が混在するのかな街に、軟石造りの建物が点在する。私が訪ねた「軟石や」もその一つだ。地元石材会社勤務経験のある小原恵さんが石造りの民家を借りて開いている。札幌軟石製品の工房であり、販売店だ。



小原さんは四年ほど前からイベントへの出店、ワークショップなどを通じて札幌軟石のPR活動に取り組んできた。同時に商品開発を進め、香料をつけて芳香剤に使える小さな家「かおるいえ」などの雑貨を生み出している。土産物として扱ってくれる外部の店も増加中だ。軟石やは、札幌軟石の歴史を伝えつつ新しい用途を広げるためのアンテナショップともいえる。小原さんによれば、石山地区には大谷の機械、技術、職人が伝わった歴史がある。建材需要の落ち込みなど現在の経済環境も同じ。「石山」と「大谷」は兄弟のような存在に見え、軟石やのチャレンジに勇気づけられる。

会員通信

那須塩原市黒磯まち歩き

NPO法人 大谷石研究会
理事 武井貴志

私が所属している（公社）日本建築協会栃木地域会では、毎年県内の建築科の学生を集め、会員と共に建築を学ぶ機会を設けています。回を重ねて今年は23回、スクリーン黒磯と銘打ち黒磯の街で開催しました。かつては木炭の集積地として栄えた街。その後新幹線の駅も外れ、合併により黒磯市の名も外れ、合併により黒磯市の名も無くなった街。実はかつて栄え現在はちよつと静かな街というのは、まち歩きに最適なんです。おまけに駅前本通りは計画道路もあり、かつての栄光を偲ばせる建物が残っています。大谷石蔵も多く、芦野石など近隣から産する石との組み合わせも多く見られます。適材適所の石使いは合理的な上、美しい表情をもっています。

最近になり従来からの商店会を中心として活性化委員会が生まれ、その呼びかけから、まちなか交流センターと図書館の公募プロジェクトが行われ、建築界では注目の街となっています。おまけにSHOZOカフェに代表されるリノベ系のカフェも多く、訪れる客層が変化しつつあります。

さて学生達は何を感じてくれたか。地域の変化のなかでの建築家の役割を見据えた上で、今後の建築活動に取り組んでくれたら嬉しいですね。

